

若者特有の嗅覚で、 社会の「これから」を 見抜き、嗅ぎ分けて

松山大学 学長 **森本三義**
まとめ／堀水潤 撮影／宮田孝之



【学長プロフィール】1952年生まれ。松山商科大学経営学部卒業。大阪大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。松山大学経営学部教授などを経て、2007年より現職。学校法人松山大学理事長。

【大学プロフィール】1923年創立の松山高等商業学校を前身に、49年松山商科大学として創立。89年松山大学と改称。経済学部(経済学科)、経営学部(経営学科)、人文学部(英語英米文学科、社会学科)、法学部(法学科)、薬学部(医療薬学科)の5学部6学科。

松山大学は少子化が進展するなかで志願者数を伸ばしています。時期みられた都会志向も落ち着き、教育環境に優れた地域の魅力が見直されたように思います。一方で、東京にオフィスを設けて就職支援を始めたこともあり、就職者の割合が首都圏に就職しています。早くからキャリア教育に力を入れ、働くことの意義を理解させることに努めてきたことも高い就職実績の背景にあるでしょう。

私が日ごろ学生に言うのは、早い時期に夢や目的をもち、目標を掲げ、その実現のために4年間の中期計画さらには1年間の短期計画を立て、PDCAサイクルを回しながら実行してほしいということです。それは管理会計学を専門とする私が普段教えている経営管理の手法と基本的に同じこと。もちろん、夢を抱いても挫折することはあるでしょう。私にもそういう経験がありました。けれど紆余曲折をし、軌道修正をしながら生きる道を探していくこともまた大切です。どう生きたいかを常に考えていけば道は見つかるはず。意志あるところに道あります。

学生から「どんな企業が良いですか?」と尋ねられることがあります。そんなときは、「私の意見は聞かないほうがいい」と答えるようにしています。どうしても

過去に基づいて考える傾向が強くなるからです。社会が必要とし、これから伸びていく企業を見抜く力は間違いなく学生のほうが優れています。若者の嗅覚でそれを嗅ぎ分けてほしいのです。企業もそうした感覚を求めているでしょう。抱えている問題を解決するために、若い人の発想力に期待しているのです。最近の例では、私の地元にある酒蔵が本学の学生らと協力し開発したお酒が好評を博しました。こうした地域連携、産官学連携を積極的に行っていきたい。

今年3月には、知の拠点として地域に貢献したいという思いから、隣接する愛媛大学と包括的な交流提携を結びました。地域を代表する国立大学と私立大学の連携は珍しいでしょう。今後は、高大連携を進めるほか、地域の教育機関すべてと協力したいと考えています。それは、学生にやさしく、大事にしてくれる風土が根付いている松山という土地だからできることだと思っています。

本学で、二生付き合える関係を築いてください。友人や師弟関係はもちろん、大学との関係も然りです。そのため在籍期間中だけでなく、卒業後もサポートできる体制を強化しているところであります。それができる大学を目指しています。